らんかこれ余の疑を退けて却つて學士の説の動かす可らざるを證明するが爲に恰好の資料たるべし、近日機を得て北監本の閲讀に從事すべきも、學士は余輩に比して同書に親まるる便宜遙かに多かる可ければ、檢索の勞を吝まるゝなくんば幸なり。

次に學士は「糺」字の音を tu, tyu と推定せられたる上、此の字が契丹及び女眞の如何なる語を寫したるものなるかについて論述せられ、白鳥博士の説として『遼史語解に糺軍字也』とあるは糺は軍の義なりといふなり、又遼史禮志及び語解に『炒伍佤戰也』とある炒伍佤は、蒙古語 šagor 燕北雜記に『粉離是戰』とある粉離は šagor の轉訛して šāri となれるものゝ對譯なり、蒙古語に戰を cherig ともいふは šāri の更に轉訛したる形なり」と記し更に學士の説として「因つて想ふに糺に tu 若くは tyu の音あるは蒙古語 šagor, šāri, cherig 等の šā, che の更に訛りたるものなるべし」と説かれたり、然れども余は此の一節に對しても亦た疑を有するものなり。學士の記さるゝ所によれば遼史語解に「糺軍字也」と見ゆとあれど、余輩の檢索する所によれば、欽定遼史語解にも遼史國語解にもかゝる記事を認むるを得ず、遼は金の誤りにあらざるかを疑ひて、金史語解について之を求めしもまた得る所なし、余の檢索にして幸に誤りなしとすれば、これに類似せる解釋は乾隆十二年校刊の金史國語解に見ゆ、即ち「諸糺詳穩邊戍之官、糺即軍字、詳穩即長官、見遼史」と記せり、學士の據られたるは或は之ならざる可きか、今之について考ふるに此の解釋の中、もとの金史語解にはたゞ「諸糺詳穩邊戍之官」とあるのみにして、「糺即軍字」以下の十二字は此の時校刊の任に當りし史臣の添加したるものにすぎず、金史編纂當時の解釋にあらざることいふ迄もなし、乾隆史臣の遼金元の國語を解釋するに當りて、定見なく、根據なく、獨斷的解釋の多きは既に定